

Take a step
～未来を想い、未来を描く～

公益社団法人 仙台青年会議所
2023年度 理事長
福重 祐作

【はじめに】

「新日本の再建は我々青年の仕事である」という覚悟のもと、日本青年会議所（以下、JCI日本）の運動が始まり、仙台青年会議所（以下、JCI仙台）は、1951年に全国で11番目の青年会議所（以下、JC）として誕生しました。これまでJCI仙台は、地域の課題解決に向けて、震災の風化防止を目的とした「しあわせな黄色いハンカチプロジェクト」、本年度で第54回となる「仙台七夕花火祭」など、持続的なまちづくり、ひとづくりに貢献してきました。昨今、新型コロナウイルスの流行により社会環境や日常生活は大きく変化し、外出自粛やテレワークの普及からデジタル化や働き方改革が推進され、新しい生活様式への対応が急速に進んでいます。JCにおいても、先行きが見えない時代の中、JC運動の本質を改めて見直す契機となり、いつの時代も私たちだからこそできる運動とは何なのかを考え、青年らしく何事にも恐れずに挑戦する気概と、まだ見ぬ明日への好奇心を持ち続け、次なる一步を踏み出すことが、明るい豊かな社会の実現に繋がることに気付かされました。私が学生時代に習っていた武道において、人生の基礎となっている言葉に「心・技・体」というものがあります。これは、ブレない芯があり、他人を思いやる心から自己犠牲の精神を磨いていく「心」、長年培ってきた経験や勘、技術を伸ばすための創意工夫を怠らない精神となる「技」、強靱な肉体だけでなく柔軟性とバランスを兼ね備えた「体」で構成されています。3つの要素がバランスよく重なり合うことにより、自分自身の感情に左右されることなく、自分の感情を俯瞰できる力を身に付けることができます。私たちは地域を支える青年リーダーとして、仙台を知り、仙台の未来を描き、自分自身がどの様に関わることができるかを冷静に判断しなければなりません。社会は日々目まぐるしい速度で変化しており、創始にはなかった様々な要因から、これまでの常識も通用しない新たな時代に移り変わっています。変わりゆく現代に対応していくには、物事の本質を捉え、自分の目指す道を歩み続けなければならないのです。

本年は、メンバー一人ひとりが、地域の課題解決に率先して取り組む青年リーダーとして、「心・技・体」を磨き、市民と共に未来を想い描くことで、しあわせを共感できる仙台の実現に向けた新たな一步を踏み出します。

【未来を切り拓く組織として】

JCI仙台は、時代背景に即した運動を展開するうえで組織の方向性を指し示す、「LO

M中期ビジョン2026」を策定し、「市民」「まち」「組織」の3本の柱からなる行動指針を掲げており、「市民」「まち」の未来像やJCI仙台のあるべき「組織」像のもと、JCの独自性とネットワークを活用した地域益から仙台の発展を目指しています。私たちが理想とする未来は、子どもたちが未来への夢や希望を思い描き成長することに対して、地域一体となり取り組む市民一人ひとりが、仙台の課題解決に向けて主体的な行動を起こすことで、しあわせを共感できる仙台の実現に繋がります。

JCI仙台は仙台市と協働のもと、「SENDAI SDGs Week 2022」を開催し、SDGsを普及啓発するとともに、JCI仙台のブランディング確立に向けた事業を行いました。持続可能なまちづくりには、国や企業だけではなく地域のステークホルダーと連携し、地域活性化と市民の意識変革とともにSDGsの達成に向けて戦略的に行動を起こす必要があります。

また、多様化する社会の発展に寄与する新たな価値の創造に向けて開催した「第34回国際アカデミーin仙台」では、JCI仙台が仙台の国際化を推進する起点となり、メンバー一人ひとりの国際の機会に対する能動的な行動力を高めることができました。今後も地域発展に向けた、行政、企業、関係団体等の協力体制を構築する必要があります。

本年は、持続可能な地域を見据えた礎を築くために、JCI及びJCI日本が主催する大会が仙台や組織にどのような影響を与え、いかにして発展に結びつくのかを調査研究及び具体化するとともに、持続可能な社会に対する見識を深め、今後の組織と運動の方向性を見出すことで、しあわせを共感できる仙台の実現に向けて、新たな一歩を踏み出します。

【未来を思い、未来を描く花火祭へ】

JCI仙台は、1970年に仙台七夕まつりの前夜祭として「ぼくとわたしのお祭り広場」として開催され、年々規模を拡大し、現在では約45万人もの観客を動員するまでの規模に拡大しました。昨今、開催にあたり打ち上げ場所の流動化や警備計画の複雑化、資材の高騰、感染防止対策など様々な問題が山積しており、市街地で打ち上げを行う全国的に見ても珍しい仙台七夕花火祭は、持続的な開催が困難な状況となっています。私たちは、仙台の発展に向けた市民意識の高揚を掲げており、仙台七夕花火祭を通じて、今後も市民の地域に対する誇りや愛する心を育み、メンバーが主催者であることを再認識するとともに、向き合うべき課題の解決に向けて最善の方法を導き出し、市民との繋がりを強固なものとする必要があります。

本年は、持続可能な仙台七夕花火祭を市民と共に創り上げるため、企業や個人からの協力や財源の多様化、更なる拡充、運営効率の向上に向けたデジタル技術を導入し、関係各所との包括的な連携を構築するとともに、多様な主体による連携基盤から仙台七夕花火祭に更なる価値を見出し、開催意義を市民へ伝播することで、未来を思い描ける仙台に向けた新たな一歩を踏み出します。

【確かな未来を描くBOSAI】

仙台防災枠組2015-2030（以下、仙台防災枠組）は、2015年に宮城県仙台市で開催された第3回国連防災世界会議で採択され、SDGsにおいても、目標1「貧困をなくそう」、目標11「住み続けられるまちづくりを」に仙台防災枠組がターゲット内に表記されている通り、誰ひとり取り残さないことへの取り組みが重要となっています。第3回国連防災世界会議では、これまで位置付けが十分ではなかったインクルーシブ防災が広がった契機となり、今まで考えに至らなかった「障がい者と防災」が大きく取り上げられました。しかしながら、仙台防災枠組は世界規模で減災を目指すものであり、スケールが大きい定めは内容を十分に理解しなければ地域や市民に浸透することはありません。またいつくるかわからない自然災害などに対し、防災活動が一過性で終わらないよう災害時だけでなく、市民のニーズに合った地域防災の在り方や防災士の役割を明確化する機会を創出するとともに、防災意識の変革と地域防災力の向上に向けた地域コミュニティの形成が必要です。

本年は、誰ひとり取り残さない防災を実現するために、地域防災の担い手を育成するとともに、多様な主体との連携のもと、防災リーダーを中心とする地域防災活動の基盤を構築することで、^{仙台}の発展に繋がる共生と共創のまちづくりへの新たな一歩を踏み出します。

【子どもたちの明るい未来を描く】

新型コロナウイルス感染症の影響が長期化する中、オンライン教育が普及し、子どもたちにとって身近なインターネットは、様々な情報収集や意思疎通のツールとして、なくてはならないものとなっている一方で、インターネット上での誹謗中傷が新たな社会問題となり、依然として解決策が見いだせずにいるのが現状です。インターネット上に溢れる情報との付き合い方や知識不足の若年層をどのように導くか、情報化社会の真価が問われる中で、情報の受け手がメディアから得た情報を正しく読み取り、適切に判断したうえで活用する力、メディアリテラシーを身に付けることが重要であり、インターネットを正しく安全に使うことが、情報化社会に生きる子どもたちに欠かせないスキルとなっています。自らが情報の受け手に立ち、どのような情報を取捨選択しているのかを知ることで、情報の発信側に立った際、自らが持つメディアリテラシーを発揮することができます。

本年は、希望に満ちた将来を思い描く子どもたちの可能性を拓くために、多様化する情報を正しく活用する術を身に付ける機会を子どもたちに提供するとともに、子どもたち同士がコミュニケーションを図れる機会を創出し、^{仙台}の未来の礎となる次代の成長を促すことで、誰もがしあわせな未来を思い描ける未来に向けた新たな一歩を踏み出します。

【人と人の繋がりが明るい未来への一歩となる】

JCI仙台は、25歳から40歳までのメンバーで構成されています。これは、JCが青年の情熱を結集し社会貢献することを目的とした組織であるからです。JCの理念と私たちが思い描く未来に共感し、JC活動を通して自己の成長を促すとともに、市民の意識を変

え、地域にインパクトを与える運動を展開することが責務となっています。多様化する社会に柔軟に対応し、広い視野で入会候補者を発掘し、仙台を想い私たちの運動に共感するメンバーが自然と集う組織となる必要があります。

また、会員拡大と並行して取り組まなくてはならない課題として、在籍年数の短期化が進む中、中長期的な視野に立った事業の展開が難しくなっていることです。この解決には、近年の社会情勢によって希薄になりつつある地域活動との関わりを強化する中で、メンバーがJ C I仙台の一員である価値を認識し、J C活動を通じて得ることができる実践的な学びの機会を享受することが必要不可欠であると考えます。

本年は、仙台の未来を創造する運動を展開し続けるために、志を同じくするメンバー一人ひとりが、J C運動の意義と組織の理念を理解のもと、会員拡大を達成し、入会に至るまでの研修プログラムを充実させ、地域の未来を切り拓く青年リーダーを育成することで、地域に新たな価値を付与し続ける組織に向けた新たな一歩を踏み出します。

【未来を切り拓く新たな価値を持った組織へ】

私たちは、修練、奉仕、友情からなるJ Cの三信条のもと、明るい豊かな社会の実現を目指して活動しています。自身の描いた未来の実現は、J Cで得られる知識を一方的に享受するのではなく、それを踏まえて展開させることであり、自らの意思で能動的に行動できるリーダーの意識向上には「心・技・体」を磨くことが重要な要素だと考えています。

「心」は、精神という意味で使われ、精神が磨かれることで体が鍛えられ、技に磨きがかかると言われており、「心・技・体」の根源とされています。人生を生き抜くうえで様々な挫折を繰り返し、克服するたびに精神に磨きがかかり、目標を成し遂げるまで継続することで自分自身にも負けない意志が醸成されます。

「技」は、武道の技・体力を意味していますが、物事に熱い情熱を傾けることで、その情熱が大きなエネルギーとなって周囲を明るくし、組織を活性化させます。

「体」は、取り組む姿勢を意味しています。礼儀の本質は相手を思いやる心や気遣いです。なりたい姿や理想の組織をイメージすることで、熱い情熱が生み出され、自らが変化していきます。

「心・技・体」3つのバランスが重要であり、その全てが揃った時、人は最高のパフォーマンスを発揮できます。私たちが常に自分自身と向き合い、自らを高めていくことで地域活動そしてJ C I仙台の活動をより質の高いものとしていくとともに、失敗を恐れず自らの行動から課題に対して解決策を見出し、異なる価値観を持った他者と協働する機会が必要です。

本年は、仙台の未来を創造する運動を展開し続けるために、行動化に向けた質の高い学びから個の力と組織力の好循環を生み出すことで、地域に新たな価値を付与し続ける組織に向けた新たな一歩を踏み出します。

【共感できる情報発信に向けて】

私たち J C I 仙台は、地域の課題から事業を計画し、市民と共に協働し実行する組織です。しかしながら、71年という歴史の中で行ってきた事業はどれだけ仙台に届いているでしょうか。J C 運動の価値を向上するには、より多くの市民に J C I 仙台の価値を認識してもらう必要があります。仙台の持続的な発展に向けた J C I 仙台の運動の最大化に向けて、多くの市民による組織の価値に対する認知と共感の輪を広げ、活動に対する市民協働を促していかななくてはなりません。

また、コロナ禍において姉妹 L O M (※1) との交流の機会が減少している中、今だからこそできる交流手法を考え、今後の J C I 仙台との関係性を強固なものとしていくとともに、J C 運動を実践していくには、J C I 仙台が掲げた目標を具現化し、行政や外部団体と連携基盤を構築する必要があります。メンバー一人ひとりが組織の価値を考え、自らの組織について理解するとともに、対象者に適した情報発信ツールを学び、組織の価値を伝播することで、メンバーの活動意欲の向上に繋がると考えます。

本年は、市民共感のもと仙台を牽引する組織へと進化するため、組織広報を通じた地域社会への事業の可能性を可視化し、情報の受け手に応じた適切なコミュニケーション手法による発信を行うとともに、他団体との協働のもと、相互に価値をもたらす関係性を構築することで、組織の活性化に向けた新たな一歩を踏み出します。

【おわりに】

自分自身の意志により選択した道を歩むことで、新たな価値が生まれ、その勇気を持った一歩は、身近な人にとっての希望の光となります。

家族のため、会社のため、仲間のために、力強い一歩を踏み出そう。

変化の激しい世の中だからこそ、時代に流されるのではなく、自ら変革の一歩を踏み出そう。

持続可能な仙台の実現に向けて

どんなことでもいい

小さな一歩からはじめよう

※1 J C I 仙台は、下記 L O M と姉妹締結をしております。

1977年 J C I パラニャーケパンバト (フィリピン)

1988年 J C I 白老 (北海道地区道南ブロック)

1989年 J C I マポ西ソウル (韓国)

1994年 J C I アイランド (香港)